様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００１１１

研究課題名（和文）アメリカ革新主義思想の一系譜：アングロ・カトリシズムと多元的共同体主義

研究課題名（英文）Anglo-Catholicism in Progressive Era America and Pluralistic Communitarianism

研究代表者
佐々木　一惠（SASAKI, MOTOE）

法政大学・国際文化学部・教授

研究者番号：８０５４７７８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、アメリカ合衆国における主流派プロテスタントとリベラル・デモクラシーの関係を、宗教=保守／世俗=リベラルの二項対立を超えた視点から捉えることで、宗教を経由した公共善に基づくリベラルな共同体主義の潮流を、アメリカ思想史の中に位置付けることを試みた。とりわけ19世紀後半に興隆したアングロ・カトリシズムを土台とする共同体主義に注目し、こうした共同体主義がこれまで言われてきた共和主義的な「伝統」の共同体への回帰というよりは、資本主義の台頭により衰退の一途をたどる「コモンズ」の再生の試みであったことを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
昨今、ポスト世俗主義の視点から、宗教と世俗の二項対立に批判的な問いかけがなされている。一方、世俗化については主流派プロテスタンティズムとリベラル・デモクラシーの共犯関係が指摘されている。本研究では、この両者の関係を、宗教=保守／世俗=リベラルといった二項対立的な枠組みを超えた視点から捉え、そこから宗教を経由したリベラルな共同体主義の潮流をアメリカ思想史の中に位置付けた。とりわけ革新主義におけるアングロ・カトリシズムの思想と実践の展開に焦点を当てることで、宗教右派／リベラルや宗教／世俗などの二項対立により不可視化されてきた、多元主義的な共同体主義の潮流を見出した。

研究成果の概要（英文）：In this study, I have attempted to situate the trend of liberal communitarianism based on the common good through religion in U.S. intellectual history. To do so, I sought to look at the relationship between mainline Protestantism and liberal democracy from a perspective beyond the religious/secular, conservative/liberal dichotomy. In particular, I focused on Anglo-Catholic communitarianism in late nineteenth-century America, showing that such communitarianism was an attempt to revive the "commons" that had declined with the rise of capitalism, rather than a return to the republican "traditional" community that had been called for.

研究分野：思想史

キーワード：共同体主義　ポスト世俗主義　公共善　プロテスタンティズム　アメリカ革新主義　有機的共同体　ジェンダー　セクシュアリティ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

1. 研究開始当初の背景

近年アメリカでは、福音派プロテスタントを中心とする宗教右派が、社会生活から大統領選に至るまで多岐にわたる問題において大きな影響力を持つようになっている。こうした状況を受け、宗教右派の興隆を分析する著書や論文、またリベラリズムの視点からアメリカの宗教的平等と多元性の歴史的重要性を強調する研究が数多く出されてきた。これらの研究に共通するのは、保守的福音派の勢力増大と保守系市民運動の拡大が連携して進展する裏側で、主流派プロテスタンティズムとリベラル・デモクラシーは共に退潮に向かっているという認識である。また、前者の保守的福音派と保守系市民運動については、双方の密接な関係が盛んに指摘される一方、後者の主流派プロテスタンティズムとリベラル・デモクラシーの関係についてはほとんど議論されてこなかった。こうした両者の非対称的な状況の背景にあるのが、アメリカのリベラル・デモクラシーの基盤となってきた宗教と世俗の対置に基づく公私二元論である。そこで、本研究では、主流派プロテスタンティズムとリベラル・デモクラシーの関係を、宗教=保守／世俗=リベラルといった二項対立的な枠組みを超えた視点から捉え、そこから宗教を経由したリベラルな共同体主義の潮流をアメリカ思想史の中に位置付け直していくことを考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、宗教を経由したリベラルな共同体主義の潮流をアメリカ思想史の中に位置付け直していくことである。そのために、これまでのアメリカ思想史で取り上げられてこなかった、革新主義期におけるアングロ・カトリシズムの思想と実践に着目した。アングロ・カトリシズムは、福音主義的プロテスタンティズムに反発する英国国教会の高教会派の神学的思潮で、19 世紀初頭のオックスフォード運動の中で、カトリック的な要素を復興していく思想・実践運動として台頭した。さらに 19 世紀後半には、大西洋をまたぐ英米間の人・思想の相互交流の中で、古典的自由主義の批判的乗り越えを目指す思潮として興隆していった。アングロ・カトリシズムの信奉者は、福音主義的プロテスタンティズムを功利主義的個人主義に基づく経済的自由放任の根源とみなし、宗教改革以前の中世的なキリスト教と共同体の再生を唱えた。そのため、アングロ・カトリシズムの影響を受けて社会改革を推進した都市中間層の多くは、共同体における共通善に基づく社会的連帯の創造を社会改革の重要な要素と捉えた。よって本研究では、このアングロ・カトリシズムを革新主義思想における宗教的潮流の一つと捉え、そこから、宗教を経由した共通善に基づく共同体主義を、今日に繋がるアメリカにおけるリベラル・デモクラシーの流れの中に位置付けていくことを試みた。さらに、20 世紀後半以降のロバート・ベラーの公共宗教などに見られる個人主義批判や、現代のコミュニタリアニズムとの関連を指摘する一方で、特定の伝統に依拠しない共通善に基づくリベラルな共同体主義の系譜を浮かび上がらせ、その今日的意義を探って

いくことを目指した。

3. 研究の方法

本研究は主に史料調査を中心に研究を進めた。一次史料として、昨今、オンライン上で公開されている史料（イギリス国教会並びに米国聖公会のオンライン・アーカイヴ、版権の切れた著作集など）を用いた。また、現地調査を行った古文書館は以下の通りである。

・The Archives of the Episcopal Church（ニューヨーク教区分館）
・Trinity Church Parish Archives (ニューヨーク市)
・The Community of St. Mary (ニューヨーク州グリニッジ、修道院)

4. 研究成果

本研究の研究成果は以下の通りである。

（1）聖十字架修女会とセツルメント運動

19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、都市貧困層、とりわけ移民を対象としたセツルメント運動は、アメリカにおける革新主義運動の先陣を切るものであった。セツルメント運動の大きな特徴は、その中心人物を含め、参加者の大半が女性であったことである。彼女たちの多くは独身で、セツルメント・ハウスを「家」とし、女性のネットワークを通じてさまざまな社会活動に積極的に参加した。セツルメントで働く彼女たちは、より包括的で多様な社会を作るために宗教的な立場を表明することを避けることが多かったため、「世俗的な人道主義者」として扱われるのがこれまでの定説であった。しかし本研究では、こうした見方とは逆に、セツルメント・ワーカーの宗教的信条が彼らの活動主義を形成する上で重要な役割を果たしたことを示すことを試みた。そのため、本研究では聖十字架修女会（SCHC）のメンバーの生活と活動を取り上げた。聖十字架修女会は、米国聖公会の平信徒の女性信仰組織であり、19 世紀後半にアングロ・カトリシズムの思潮の影響下で設立された。リベラル・プロテスタントに見られた、近代的な科学知識に基づく人間の努力により社会は進歩するという見解とは対照的に、アングロ・カソリックでは反近代主義の傾向が見られた。中世社会における有機的共同体主義を、功利主義的で個人主義的な近代資本主義社会への解毒剤として理想化したのである。そこで、本研究ではアメリカ北東部の都市を代表するセツルメント・ハウスの創設者でもあった聖十字架修女会の 3 人のメンバーの生活と活動を探ることで、彼女らの活動が、有機的共同体主義を含む彼女らの宗教的信条に大きく影響されていたことを明らかにした。

（2）革新主義期アメリカの教会建築思想にみる信仰実践

本研究では多作なアメリカの建築家であり、米国聖公会の熱心なアングロカトリック信者であったラルフ・アダムス・クラムの教会建築と建築思想を手がかりに、革新主義期のアメリカにおいて有機的共同体と公共善を復興させる試みを追った。クラムはニーチェ的な言葉で言えば、人生の無重力感に苦しんでいた若者の一人であり、20 代半ばにユニテリア

ンから聖公会に改宗し、アングロ・カトリシズムの教えに基づいた教会建築を通して、人生の意味を回復する努力を始めた。新進の教会建築家としてクラムが試みたのは、15 世紀のイギリス・ゴシック様式の教会建築をアメリカに移植することであった。またクラムは著作を通じて、プロテスタンティズムに由来し、アメリカの資本主義や帝国主義を形成している功利主義的個人主義を鋭く批判した。そこからクラムは、中世の有機的共同体の回復と、社会正義と平等に基づく人々の団結と公共善のあり方を提唱した。本研究では、革新主義的な社会改革を通じて広まったプロテスタンティズムの画一的な中産階級規範の中で、セクシュアリティを含む人間の多様性の表現が抑圧されていた時代に、クラムが人生の実存主義の回復を求めたことを示した。また、クラムの試みは、革新主義時代のアメリカにおいて、拡大し続ける「生権力」から人々が避難するためのコミューンのようなものを作ることであったことを明らかにした。

（3）ウェーバーのプロテスタンティズム観から捉える革新主義期の「生権力」に抗するアングロ・カトリシズムの思想と実践

本研究では、ウェーバーのプロテスタンティズムの支配の解釈を手がかりに、アングロ・カトリシズムを土台とした＜脱・脱魔術化＞の実践としての典礼・教会・修道院の復興と、それを通じた「生」の複数性の回復の試みを検討した。ここから浮かび上がってきたのは、アングロ・カトリシズムによるプロテスタント批判の基底には、革新主義期のアメリカで急速に拡がる排他的な「生」の管理・統治への危機感があったこと、またそこに亡霊と化して其処此処に漂うプロテスタンティズムの倫理の脱け殻を見出していたことであった。アングロ・カトリックにとって、ウェーバーが描いた「ピューリタン的な圧制」を心から受け入れ、また「この圧制を擁護するために英雄的な行動に走った」かつてのプロテスタントの「経済的に上昇した『市民』の中間層」とは、まさに革新主義期アメリカの改革志向のプロテスタントの都市中産階級層に他ならなかった。ここから革新主義期アメリカにおけるアングロ・カトリックの諸実践とは、リバイアサンを飼い慣らそうとする中で逆に囲い込まれていったプロテスタントが「意図せずして」加担することになった「生政治」に抗い、「生」の疎外からの脱却と「生」の複数性の回復を試みた実践であったことを示した。

（4）プロテスタント女子修道会における活動と観想

本研究では、19 世紀後半のアメリカで修道女の「生」を自ら選び取ったプロテスタントの女性たちの生き方と主体の関係について、米国聖公会の聖マリア修女会を取り上げ検討した。聖マリア修女会設立の可能性を拓くことになったのは、福音主義の女性観の副産物として生み出された「性的不在」言説であった。この女性の「性的不在」言説は、プロテスタントの「有用性」の倫理観と結びつき、公共善の担い手としての独身女性という新たな女性主体の確立を後押ししていった。しかし、聖マリア修女会が「神に奉献した生」の拠り所としたのは福音主義ではなかった。なぜなら、福音主義では道徳（モラル）と労働の「活動的性」に重点が置かれていたからである。聖マリア修女会が追求した真の「有用性」とは、労働の「活動的性」と祈りと献身の「観想的性」が融合する地平で発揮されるものであった。

ここから浮かび上がってくるのは、福音主義に基盤を置き、家庭そして母性的利他主義に基づき「有用性」の発揮を試みたプロテスタントの女性たちの活動と神のみに自己を捧げ独身を守り普遍的愛に生きることを基盤に、労働と祈りの中に「有用性」の発揮を試みた聖マリア修女会のシスターたちの活動の間に存在した、「見え方」の違いである。「活動的生」に重点を置く前者は、より「世俗」的なものとして映る一方、「活動的生」と「観想的生」の融合を望んだ後者は、より「宗教」なものと映った。しかし、前節の最後に述べたように、聖マリア修女会が展開した社会的貢献活動は、前者と勝らずとも劣らぬものがあった。にもかかわらず、女性史・ジェンダー史、とりわけ革新主義の社会改革運動の研究において修女会が取り上げられることは少なかった。そこには、「世俗= 解放・進歩」＞「宗教＝抑圧・後進」のヒエラルキーが存在していたと言える。さらにそれに加えて、19 世紀後半のアメリカにおけるプロテスタント内部で生じていた変化のダイナミズムの影響も存在していた。それは、アメリカのプロテスタントに関する従来の＜リベラル派＞／＜福音派＞の構図とは異なるもの、あるいはそれに収まらないものでもあった。なぜなら、福音主義の女性たちの「活動的生」に焦点を当てた「有用性」の発揮は、修女会の女性たちの「活動的生」と「観想的生」の共存の中での「有用性」の発揮との関係の中で、より世俗的な要素を帯びる方向へと向かっていったからである。よって、修女会の女性たちの「生」のあり方は、革新主義期アメリカにおける女性主体の関係の多様性を示すものであり、世俗＞宗教のヒエラルキーや異性愛／同性愛の二項対立を超えた地平を拓く試みであった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 佐々木一惠	４．巻 24
２．論文標題 「神に奉献した生」とプロテスタントの女性主体―19世紀後半のアメリカにおける聖マリア修女会の実践から―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 異文化	６．最初と最後の頁 91-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐々木一惠	４．巻 56
２．論文標題 善き生の回復を求めてーラルフ・アダムズ・クラムの教会建築論に見る革新主義期アメリカに抗するアングロ・カトリシズムの想像力(イマジェリー)	５．発行年 2022年
３．雑誌名 年報アメリカ研究	６．最初と最後の頁 177-196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐々木一惠	４．巻 23
２．論文標題 プロテスタンティズムの倫理と革新主義期アメリカの精神―アングロ・カトリシズムの視点から見る生政治―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 異文化	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐々木一惠	４．巻 16
２．論文標題 聖十字架修女会の会員とセツルメント運動―生と活動の様式としてのアングロ・カトリシズムー	５．発行年 2020年
３．雑誌名 ジェンダー史学	６．最初と最後の頁 21-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Motoe Sasaki
２．発表標題 Creating a Cooperative Community through Prayer and Activism: Ellen Gates Starr, Vida D. Scudder, Mary Kingsbury Simkhovitch and the Episcopal Laywomen’s Order
３．学会等名 American Historical Organization (Virtual AHA)（国際学会）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関